

歴史を創る顔 — 芒市撤退作戦 —

京都郡豊津町 神崎 博

それは戦争末期、中国雲南省からビルマ戦線に至る間の挿話である。私の所属する第56師団（龍兵団）は、9月7日、拉孟守備隊1200名が雲南省怒江西岸の陣地で100日間の抗戦も空しく玉砕したのである。さらに9月13日には騰越守備隊も玉砕し、その後、圧倒的な重慶軍の攻撃に昭和17年5月の進攻作戦以来、布陣していた雲南省より填緬公路沿に抵抗しながらも、米式装備を完備した15倍にも及ぶ敵軍に抗し難く、余儀無く撤退が続けられていた。私ども砲兵隊は撤退作戦においては、友軍の撤退を容易にするための撤退援護射撃が任務であり、ある程度友軍の撤退を完成させるまで射撃を続けなければならず、私ども砲兵自身の撤退はいつも最後になるのだった。その頃（昭和19年11月7日頃）わが軍の「龍陵」放棄に伴い、重慶軍は「芒市」奪還を呼号して追撃に移り、「芒市」外周陣地に迫り連日激しい攻撃が繰り返されていた。

私の隊は芒市の郊外の竹藪の端に放列陣地を敷いた。最初の頃は、朝のうち野菜や餅などを持ち、物売りに来ていた現地人も戦闘激化に伴い姿をみせなくなった。私の隊は街の東南方、崎山方面を守備する歩兵に協力して、その要請で射撃を実施していた。しかし、常時、敵の観測機が上空を緩い速度で舞っており、射撃もためられた。それは、私どもが射撃を開始すれば上空の敵の観測機が我々の位置を敵陣に連絡し、直ちに敵砲兵の返礼射撃が始まるのだった。敵砲兵の鈍い発射音を聞くと同時に、砲側の壕に身を伏せる。ヒーユーゥと聞こえる不気味な弾道音と同時に物凄いい炸裂音と爆風が響き、付近の樹々の小枝や葉っぱを吹き千切る。「良くもこんなに弾丸があるものだ」と思われる程、執拗に敵の射撃は続く。その頃、軍は爾後の弾薬補給の困難なことを考慮して、その節約を強調するため、軍命令をもって砲兵隊に次のとおり射撃を規制していた。

- 一 十榴・野砲 2000m以内
- 二 山砲 1000m以内

その様な状況の中で、ふんだんに射撃できる敵の砲兵が羨ましくも思え、砲兵の射撃を規制しなければならぬ我が軍の前途が憂慮されるものだった。随分長く感じられた激しい敵の砲撃も終わったので、壕から這い出してみた。辺りは午後の陽を受け静寂が漂っていたものの、その惨状は眼を覆うばかりであった。

しかし唯一つ「救われた」と、思われたことは、奇蹟的にも火砲や兵員に被害の無いことであった。その頃、師団砲兵として保有している、このクラスの火砲（10cm榴弾砲）は、この1門だけであった。

重慶軍は「芒市」奪還を呼号して益々攻撃は熾烈になってきた。私の隊は直接、敵歩兵の攻撃を受けないものの、毎日敵機の攻撃と不気味な敵砲兵の砲撃にさらされる日が2週間くらい続

いた。そのころ師団司令部で敵の暗号電報を傍受し解読した結果、「芒市」総攻撃は11月19日と判断した。当面の敵軍は師団の判断どおり、19日払暁から全線にわたって攻撃を開始してきた。その日も長い一日だったが、日没後に、撤退命令を受けた。

あの夜の「芒市」撤退の情景は半世紀を過ぎた今でも、鮮やかに脳裡に残っている。

「芒市」平野は雲南省に於いて屈指の穀倉地帯であると聞いていた。ちょうどその頃は秋の収穫の時季であり、果てしなく続く広い田圃に、刈り取られた稲束が2mくらいの高さに積まれ、広い田圃に点々と並んでおり、それは長閑な農村の風景であった。

黄昏どきになり、広い田圃のあちこちから、白い煙が立ちのぼっていた。それは、田圃に積まれた稲束が燃えている煙であった。聞くところによると、師団のこの地を撤退するに当たり、敵に食糧を残さないために軍命令により、すべて焼却するのだとのことだった。その夜の深更に敵に離脱し、芒市から撤退した。遮放峠を越える時、トラックの上から芒市平野を振り返って見ると、まだ稲束の燃える火が平野一面に見受けられた。農家出身の私は、現地農民の気持ちが解るような気がして、なんとなく心が重く閉ざされた。1年間も営々辛抱して収穫した、農民にとって大切な米を燃やした日本軍と日本人に対し怨嗟の気持ちはいつまでも消えないことだろうと思った。

－森本軍曹の死－

重慶軍の追撃は激しく、12月の下旬には国境の町ワンチンまで追尾された。1月2日正午過ぎに、少数の敵が友軍歩兵の間隙を縫い、私たちの砲兵陣地に迫った。その時、砲側に投げ込まれた手榴弾により、尾崎伍長は腹部をやられ戦死、私は左腕に擦過傷を受けた。あの時、柘榴のような傷口をみて、とても駄目だとは思ったが彼を抱いて「傷は浅いぞ」と言ったが、尾崎は「曹長殿、自分の傷は自分で解ります」と眩き、「天皇陛下万歳」と小さな声で眩き、私の腕の中で息絶えた。その夜ナムパカまで撤退し陣地を敷いた。

その当時（1月中旬）西北方レド公路から東進する英・印・中連合軍に退路を遮断され、師団は始めて経験する事態であり、まさに危殆に瀕していた。「食欲がないと聞きましたのでね森本が寿司を作りましたので食べて下さい」と、平素は横着者の定評のある森本軍曹が、薄汚い食器に寿司らしいものを盛り持参した。昨日からマラリアの発熱により病臥していた私は食欲がなく憔悴していた。

「森本は今晚、挺身班に行つて参ります」と告げ、アタフタと闇の中に去って行った。

そのころ敵は日々包囲の輪を縮め、弾薬集積所も燃料貯蔵所も敵の手に陥っていた。後方からの補給は望み得ない現状では、この300tの弾薬は師団の死生を制するものであった。従つて各隊から毎晩使役兵を出し、弾薬の奪い返しを繰り返していた。毎晩幾つかの弾薬は手に入るものの、我が方の犠牲も多かった。レモンの酢の良く利いた、心尽くしの寿司を食べ、暫し快くまどろんでいたと思われるころ、闇の中に人々のざわめく気配を感じ眼を向けたら、森本軍曹に同行した椋本兵長だった。彼は蒼白な顔で穴の開いた血塗れの鉄帽を抱え「森本軍曹殿がやられました」と、緊張した声で報告した。そして戦友に收容された森本軍曹の遺

骸が帰ってきた。

薄暗い灯火の下に見る、血と泥に汚れた彼の顔は苦悶に歪んでいた。

つい先刻までは、あんなに元気でいた彼の変わり果てた姿に私は、込み上げる涙を抑え暫し黙とうを捧げた。その夜、眠られぬままに部下達の幕舎を覗いて回った。誰もが連日の疲れで死んだように眠り込んでいる。

苦悶に歪んだ森本軍曹の顔も、泥と垢に塗れて無邪気に眠る椋本兵長の童顔も、民族の宿命と言うか、この世紀の奔流の中に在って、「日本の歴史を創る顔」として私に沁々と感じた。